

### 議題1. PHR アプリ間の連携について

アプリ間でデータを共有する標準プロトコルとして有力なものに Open mHealth と HL7 がある。Open mHealth はスマホなどのデータを医療システムにアップする際の共通データフォーマットやデータ移動のプロトコル。アメリカ電気電子学会 (IEEE) で標準化作業 (IEEE P1752) が進んでいる。HL7 は医療機関におけるシステム間やアプリ間での共通化が目的。

いずれもデータや通信プロトコルの共通化なので (OSI モデルのレイヤー7がベース)、アプリそのものについてのルール、つまり PHR をどのように使うか、また実際の運用をどのようにするかなどについてはあまり考慮されていない。

PHR 協会連携委員会はその点を議論している。例えば、医療データを集める理由、集め方、保存方法、セキュリティ、廃棄方法などについて議論し、最良の方法を決め、提案していく。

データの保存1つをとっても、データのフォーマット、保存形態、保存場所はどうか、保存媒体は何が良いか、保存期間中のデータ劣化、データを預けた場合継続性をどのように担保するか、誰がどのようにして廃棄するか、など多くの解決すべき問題がある。

また PHR 化されたデータをどのように使うかについても様々な応用が考えられる。例えば個人ではワクチン接種の記録や証明、先天性疾患の治療記録など。企業においても特化物健診記録など30年、できればそれ以上の保存が求められているものもあり、M&A が進む昨今では企業よりも個人が自分で保存していた方が確実なものもある。

データのセキュリティについては、データを1か所に集めた場合、外部からデータを暗号化して、それを人質にとって身代金を要求するような事件が最近頻発しているが、個人が PHR として持っていれば防止できる。

### 議題2. PHR アプリの実証研究について

織田先生が開発した PHR アプリを大神教室で実証研究する計画となっている。PHR 協会連携委員会は非公式に応援して、結果について議論したい。

PHR アプリにおける OSI モデルのレイヤー7以下について今回は言及不要と思われる。すなわち PHR アプリは個人が医用情報を誰でも安全かつ容易に使用出来るのが目的で、そのアプリがどのようなハードウェアで動き、また OS やプラットフォーム、データの保存法用やアプリ間通信、セキュリティ等々は背後に隠れている技術であり、連携委員会よりも技術委員会で議論するものである。

今回の実証研究は、事業所における主治医と産業医の情報交換に労働者本人がアプリを使用した感想のみをアンケート調査し実際の使用感について意見を集計する過程で、今後必要となる技術要件も調査できる。